

# 日朝間の窓を開ければ……

● 私たちはこう思う

中嶋嶺雄

私自身、アジアの国際関係や中国問題を専門にしていながら、北朝鮮については、一昨年五月に現地を訪れるまで、一種のブラック・ボックスが宙に浮いているように感じていて、二〇〇万の人口をもつ朝鮮民主主義人民共和国の活きた現実をほとんどつかんでいなかった。むしろ、何か国際的に重大な事件やトラブルがあるときにのみ、北朝鮮の存在を強く意識した、といってもよいように思う。従って、平壤も北京よりずっと遠くの都市であるかのように、なんとなく感じていた。いうまでもなく、実際には、北京と東京のほぼ中間に位置し、緯度はおよそ仙台に等しいのだから、わが国にとつては至近距離なのである。

それなのに、平壤がそのように遠い存在であるのは、日朝間に国交がなく、両国間の交流がごく限られたものであるからにはかならない。国際社会がますます、非国境化、しつつか

り、経済交流や相互依存関係のネットワークもますます広がりとつあるというのに、北朝鮮のようにこんなに近い国との交流が閉ざされていることこそ、問題である。

従来は、むしろ北朝鮮側に交流をみずから閉ざそうとする体質があったことも明らかであり、わが国の側には国交関係にある韓国への配慮もあった。

しかし、昨年末の南北朝鮮の「合意」もあったことであり、現在は、北朝鮮の側が、日本や西側諸国との交流を持つとうとしているのだから、一日も早く国交を樹立し、日朝間の窓を開くべきである。

窓を開いてみれば、北朝鮮はたしかにチュチ

# いま一度過去の暴虐に目を

● 私たちはこう思う

國弘正雄

エ思想に鼓吹された特異な独裁体制下にある国ではあっても、二〇〇〇万の国民がそれなりに息づいている国家であることがたどこころに諒解されるであろうし、同時にこの国はまたたく間に西側の情報空間の中に入ってくるであろう。このような展望に立つなら、日本政府の側は当面の日朝交渉においても、些事にこだわらべきではないと私は思う。

北朝鮮と台湾という、わが国のすぐ北と南に同じ二〇〇〇万の国民を有する活きた現実があるというのに、この両者との外交関係がまったく閉ざされているという、アジアのごく近い地域との国際関係のあり方を問うことなしに、わが国のアジア外交は成り立たないはずである。

(なかじま・みねお 東京外大教授・国際関係論)

日本と朝鮮半島とのかかわりを論ずるにあたり、ややもするといまの韓国のみを対象にしたかな憐れみを小生長いこと抱いてきました。

たとえば、朝鮮民族の共通語であるチョソン語のことを、韓国語と呼びならわしてきました。コリヤ語とかハングル語という苦心の作が

たしかに不熟であることを認めつつも、韓国語と呼ぶことは、英語をアメリカ語とかオーストラリア語と呼ぶ以上に不正確きわまりないことでしたが、慣用に押れ込んできたというのか、だれも怪しみませんでした。

日本による朝鮮半島支配が、いまの共和国と